

日航ジャンボ機墜落事故から 30 年

例によって門田隆将氏の「風にそよぐ墓標 父と息子の日航機墜落事故」を読んだ。2010年に刊行されている。

日航ジャンボ機といえば、史上最大の被害者をだした「人災」である。524人中4人が救出された。なかでも川上慶子さんが、自衛隊員に抱かれてヘリコプターに収容される画像は、今もって脳裏に焼きついている。ご両親も妹もなくされた。この子の中学生のお兄ちゃんが、健気にも「高校へ行くのを諦めて働く」と言った。

この川上慶子さんを抱き上げて救ったのが、自衛隊の中でもエリート集団である習志野空挺部隊のとびきりのエース、作間優一さんである。歯を食いしばっての救出に、日本中のみならず世界中の感動を呼んだ。いわば、悲劇の中のほとんど唯一とっていいほどの希望の象徴であった。

「習志野空挺部隊をなぜもっと早く投入しなかったのか」

「夜明けとともに出動させていたら、生存者はさらに増えていただろう」との声が今もってある。(生存者の証言で、あと何人かは助かっていた可能性がある。)

後述するが、上層部の判断力のなさによる、と言われている。しかし、生存者がみつかりました、という報に「まさか」と空挺部隊の面々が声を発したくらいだから(それほど現場は悲惨な状況だった)、まさか上層部も生存者がいるとは思わなかったのだろう。やむを得ない面もある。まして、災害救助に習志野空挺部隊が投入されることは、余程の事故でないとあり得ない。

事故で亡くなった方々の話とその息子さんたちとの交情を著したものであるが、ボクは、冒頭の作間さんの話に圧倒されてしまった。

(以前に、遺体捜索をしていた人々の本を読んだとき、事故発生後数日して何人かで昼食に食堂に入ったら、死体の匂いがする、とその場にいた人々が逃げ出した逸話がある。特に前方に座席のあった人の状態は、書くのもいやになるほどひどい状態だった。生存者は、後部座席の人ばかりである。)

作間優一さんの話を以下に引用させてもらう。作間さんの人生観を一変させたほどのものである。

「クマさん、頼む！」クマさんとは、作間さんの愛称だ。上官の岡部二尉はそう叫ぶと川上慶子さんの命を作間さんに託した。この時、岡部二尉も作間さんも川上慶子さんを男の子だと思い込んでいた。髪の毛も短く、短パン姿で、顔も汚れて黒くなっていたからだ。「子どもは、抱いて上がってください！」看護婦の要請で、作間さんはぐっと抱き上げ、足で下半身を固定した。鼓膜を突き破るようなヘリの爆音の中で、作間さんと慶子さんの身

体は浮き上がっていった。

その場所に門田さんが作間さんを連れて行った。

「てっきり(慶子さんを)男の子だと思っていました。地上から身体が浮いた時、ミルクの匂いというか、母乳の匂いがしたんですよ。その時、なぜか急に涙がこみ上げてきましてね。あの時、私の子どもは上が小学校3年生で、下が3つでした。上は男で下が女の子です。子どもって赤ちゃんの時に母乳というか、そういう匂いがするじゃないですか。それを感じたんです。涙を止めるのに必死で、歯を食いしばりました。絶対に命に代えてもこの子を助ける、という思いでした。」

最初に見た凄惨な遺体と自分が抱いている生存者の匂い。作間さんは、極限の場面で人間の生というものに対する感動を覚えたのかもしれない。

作間さんは、父親として慶子さんを抱きかかえていたのだ。(中略)

作間さんは、意外な話をしてくれた。

「(略); 作間さんは夜までに現場に戻れず、ヘリコプターの横で一夜を明かした。……いろいろなことを考えました。夜、一番考えたのは、自分が抱えたあの子は、これからどうやって生きていくのか、ということです。あの状況では家族は助かっているだろうし、きっとこれから一人で生きていかなければいけないだろう、と思いました。私は、あの子にもし身寄りがないんだったら、うちで養子にしよう、と考えていました。それを女房に何て言おうか、女房は納得してくれるだろうか、と思いながらあの夜を過ごしました。」

なぜ作間さんはそんなことを考えたのだろうか。

「私たちが行って救助したのは事故から10何時間後ですよ。私は、彼女を上げながら、この子はまともな人生というか、人を怨まずに人生を送れるのかということ考えたんです。だから自分が面倒を見なければいけないのではないかと、思ったんです。でも、その後、入院した川上さんが、お世話になった看護婦さんに感謝の手紙を書いたじゃないですか。報道でそれを知った時に、ほっとしたんです。人を怨まない、感謝する気持ちを忘れないでこの子はいてくれたんだな、と思いました。その時に、ヘンな言い方ですけど、ああ心配しないでいいんだ、これで自分との縁は切れたなあ、と思ったんですよ。あの子が、感謝するという気持ちを持っていたことに、私は安心しました。」

自分が吊り上げていった人間を作間さんはそこまで気にとめていたのである。

川上慶子さんについては、さすがに厚顔無恥な連中も追跡することなく、市井に埋没していつてくれた。

この日航ジャンボ機の事故が1985年8月12日。その10年後に阪神淡路大震災。川上さんは、看護婦になって尼崎かどこかで働いていて、ボランティア活動で活躍した、という。……このとき、何という数奇な運命に生まれた子だろう、と

書いたことがある。今なら、いいお母さんになっているだろう。

気持ちの整理がついたら、作間さんに会わせてあげたい。最後に、作間さんは「**今度は一人でここに来て泊まり、ここで眠る方々と一晩、話をしなければ……**」と呟いた。

どこやらの小児科の連中に教えてやりたい。こいつらにも子どもがいるだろう。孫がいる者もいるかも知れない。人生で、命を賭けてであったけれども、一瞬のすれ違いがあっただけの子のことをここまで考えるか！　しかし、日本人はそうしてきたのである。

習志野空挺部隊の投入が遅れた、といいながら、阪神淡路大震災に際して自衛隊の投入が遅れたため、助かる生命も数多く失われた。ときの総理村山トシ吉は、「なにせ初めてのことであり、……」と釈明していた。まったく学習していない。情けないことに、この程度の人物を総理大臣に選ばざるを得なかったのだ。この年にはサリン事件もあった。

それから 10 年、今度は JR 福知山線の脱線事故である。もう 10 年になる。

しかし、人災は、いつどこで起こってもおかしくはないし、天災も 2011 年の東日本大地震、2014 年には広島のと砂崩れ、御嶽山の爆発。毎年のように発生している。

どうも、この 20～30 年来、日本列島のみならず、世界中が地殻変動の時期になってきているのではないか。……チリの火山の爆発。今はネパールの大地震で被害が甚大だし。

僕らが学生時代から信用している木村政昭先生によれば、地殻においても、東日本大地震は日本全国に影響を与えている。今、日本列島の中央部の火山活動が活発になってきているという。木村先生は、奥尻島沖地震も東日本の大地震も予測しておられたし、今年の御嶽山の爆発も、2013 年±4 年での中。今年あたり、富士山も考慮しなければならないのかもしれない。富士山については、2017 年±5 年、浅間山は、2012 年±4 年という。浅間山は、すでに活動が活発化しているとも言える、という。富士山も、もういつ爆発してもおかしくない。

木村先生の話は改めてまとめるつもり。

2015. 05. 01.